

◆概要

○生糸価格がジワジワと上がる中で、為替相場が円高から一転した。衆議院が解散、安倍政権が発足、それぞれの「節目」に前後して市場が反応し、円安・株高が加速している。経済再生を唱えるアベノミクスのシナリオ通りに進んでいる。日本経済全体には追い風だが、繊維産業には急激な円安に伴うコスト増の影響が広がっている。

○特に生糸を輸入し、国内消費で完結する和装業界では、生糸価格の高騰に加え、円安は、石油を原料とする加工薬剤・染料や燃料の値上がりが重なり、さらに生産コストが上がる。末端消費の回復には至らない中で、商いは厳しさを増している。

また、政権交代しても消費増税は変わらない。円安の進行と消費増税は今後の大きな不安材料としている。

○糸価の高騰と円安がどこまで進むか見通しが立たない中で、白生地についてはとりあえず手配しておこうと、生地値がアップする中で仮需が起きている。生地の値上がりは染め潰しから前売り等の先にも浸透しました。しかし、小売りまでは至っていないようだ。

ただ、一部ではあるが百貨店や専門店では、株価上昇に伴い高額品が動き出した。株高が「心理的に追い風になっている」と見ている。

○室町も西陣も一番大きな課題は「ものづくり現場の確保」である。ものづくりの危機は以前から懸念していたが、いよいよ現実のものとなってきた。生地の入手から販売までの新しいルート作りや、新しいパートナーを求めて丹後に伺いたいとの意向を示し、今動かないと衰退のスピードに追い越されるとしている。

◆流通・販売

○今後の価格の上昇が見えない中で白生地に仮需が起きている。円安の進行は国策で行われたこと、白生地の値上がりを人の性にでき、高く売ることができ。しかし、上代単価は頭打ちであり大変な状況だ。転嫁できない分を自社内で圧縮しているとの声が聞かれた。

新しい商いは難しい。1月の糸価は3月に浸透する。3月は5月となる。影響はこれからでてくる。和装業界には、景気の悪い状況はいち早く現れ、回復は一番遅くなる。単純に見て、この状況は参議院選までは行くのではないか。全体は見えない。さわったところで判断している。

○機場の確保が難しく、もの作りができない状況の中で、今日までのルートが変わろうとしている。白生地の仕入れは、問屋を飛ばして機場と直接行う。また、前売りを飛ばして小売店か消費者に直接売っていく。このように販売ルートを変えることで、各パートナーへの利益配分を高める体制を模索している。

◆生産・商品

○白生地の生産基盤が弱くなっている。丹後もメニュー不足だ。新しいブランドが欲しい。ものの作れるところが偏ってきた。これに対してベトナムでの生産が多くなってきた。低価格品は、輸入物と丹後物の差がなくなってきた。

問屋目線では丹後の印が必要だが、消費者目線では関係ない。しかし、こだわったもの作りには丹後の生地が必要であり、生地の手配ができないと染めの職人

が離れてしまう。輸入物と比較して丹後の生地は高くてもよいと思っている。それはケアできる商品だからである。

○もの作りには戦略が必要だ。大河ドラマ「八重の桜」にちなんで桜の柄を作った。好評を得た。しかし、新しい柄を作るには紋紙代など費用が発生する。安くするために地紋の手直しなどで対応しているが長くは続かない。点と線を基本にした紋丈の短いもので費用を少なくしている。

○ヘビーユーザーは持っていないものを求めている。防染加工糸や銀通しなどを組み合わせたもので、白防染や色防染の組合せで立体感を表現している。防染糸の加工も安定してきた。また、温暖化の中で薄手の生地が求められている。紋紗や一重の時期が長くなり、薄手のものは塵よけの用途もある。

○振り袖は、昨年不振であった。今年は仕掛かりが早くなっている。価格はセットで38万円、48万円とクラスはあるが、同じ価格で加工度合いが上がっている。そのため利益率は低くなっている。

十日町は職人を確保し、京都とは異なった路線でもの作りができています。前売り問屋は、企画力に優れた十日町の商品に魅力を感じている。十日町もインクジェットを使っているが、箔の使用や空絞りのその後加工との併用がうまい。しかし、京都は各社が同じようなもの作りで差別化ができず、下のくぐりあいだ。

◆西陣メーカー

○西陣全体としては厳しい状況である。昨年の秋前から厳しくなり、年明け一段と厳しくなった。特に問屋渡しの1万円前後の低価格帯地メーカーが苦戦している。そのため、製織現場である丹後の年金機屋の廃業が進んでいると思う。

デフレの状況では高額品の動きが悪い。中級品から上のメーカーも苦戦。在庫が多く、生産を停止している。多くのメーカーで、ものが作れなくなり、特定のメーカーに仕事が回ってくる。これを残存者利益と呼んでおり、企業間格差が大きくなっている。

○糸価の高騰に対して、半分のメーカーは価格を上げている。しかし、値上げのできないところは、値が合うように織り方を変えている。正絹を絹紡糸やポリエステルに、また増量加工糸の使用。さらに金銀糸では、銀の蒸着仕様をポリエステルフィルムへの着色で対応するなど従来品と比較すると10分の1程度の価格差がある。

そのため、品質表示の変更が必要となってきた。品質表示は生産者が示すものであり、消費者をだましてはいけぬ。正絹証紙とそうでないものと証紙の種類を変えることを検討中である。

原料高の製品安。円安で石油が上がり、染料も値上がりした。染め屋も大きなダメージを受けている。こうした中で値上げのできないメーカーは廃業の要因となっている。

○丹後の機場は高齢化が進み、難しいものが織れなくなった。そうした中で昨年の秋頃には、40～50歳代の機場を中心に、20～30%の工賃アップで引き抜きあるなど、機場の取り合いが起きている。それを機に工賃が上げられた機場があるようだ。